Harmonia

あらはばき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈａｒｍｏｎｉａ

【Ｎコード】
Ｎ１３０４ＢＡ

【作者名】
あらはばき

【あらすじ】
青年は失意の中、決断する。
自分の想い。
周囲の想い。
その想いに応える為に・・・。

異世界トリップ物です。
主人公最強系ではないと思われます。
コメディ３：マッタリ４：シリアス３の割合で行こうかと思ってい

ます。
素人がややこしい題材をメインに据えて書いています（え
生暖かい目で読んで頂ければ幸いです（ぁ

プロローグ

『踊りたい』

とある男が失意の中そう呟いた。

『歌いたい』

とある女が悲嘆の中そう呟いた。

いつ、何処で、誰とも知らぬ二人の呟きは、蒼い空へと吸い込まれていく。

最近よく夢を見る。
今の自分の置かれている環境がそうさせるのかも知れないし、そうじゃないのかもしれない・・・。
夢の内容はこう・・・。
だだっ広い草原、丘のような場所にポツンと佇む木造の家の前。
そこに一人の女の人が草原を見つめながら悲しそうな表情で立っている。
何か喋ろうとしているのか・・・時折口を開いは閉じを繰り返しているだけ。
それを俺は正面から見ているだけ。
動くことも、声をかけることも出来ず、ただひたすらその様子を夢に見ている。
目が覚めても夢の内容を忘れることはなかった。
と言うよりも、ここに来てからと言うもの、繰り返し同じ夢を見続ければ嫌でも覚えてしまう・・・。
俺はベッドの柵に手を掛け、身体を起こす。
外を見ると嫌がらせの如く太陽が照り付けている。

「おはようございます」

そんな時、扉を開け女の人が部屋に入って来る。

「あら？起きてたんですね」

俗に言うナース服を着た女の人はそう問いかけてくる。
俺は軽く挨拶を交わし、ベッドの上で身体をずらしながら直ぐ近く

に立て掛けられていた松葉杖を引き寄せる。

「散歩ですか？」

看護師の問いに肯定を返し、まともに動かない左足を引き摺りながら病室を後にした。
余り考えたくないけど少し過去の事を思い出してみる・・・。
こんな足になる前、俺は『踊り手』だった。
幼い頃から何故か踊ることが大好きなクソガキがそのまま成長して大人になり『ついこの間』まで好きなだけ踊り続けていた。
バレエ、ジャズ、社交ダンス、ＨｉｐＨｏｐ、ｅｔｃ・・・踊りというジャンルに属する物なら何でもござれな雑食ダンサー。
親にはダンス教室代なんかで多大な迷惑も掛けたし、その恩を返すことが出来そうな矢先に俺は事故に巻き込まれた。
所属していた劇団の勧めで海外でも有名なバレエ劇団の入団オーディションに参加、見事合格を貰った矢先にそれは起こった。
浮かれ気分で帰宅している途中。
オーディション会場から遠く離れていたアパートに帰り着くまでもう直ぐ・・・と言う所。
足元にじゃれ付いてきた顔見知りの猫を一通り撫で終えた直ぐ後だった。
猫が急に道に飛び出した。
危ないからと抱きかかえ、歩道に戻ろうとしたそんな時だった。
猛スピードで突っ込んできた乗用車に避ける間もなく撥ねられた。
腰に受けた激しいと言う言葉では足りないほどの衝撃。
一瞬で通り過ぎていった激痛以外に確かな記憶はない。
目が覚めると病室のベッドの上。
色々と説明してくる医者の話の中で唯一ハッキリとわかった事・・・

。

『もう踊ることは出来ない』

突っ込んできた車が俺の左側の腰を撥ね飛ばした。
その影響で腰の骨が砕け、左足に繋がる神経がダメになった。
出来うる限り手は尽くしたと医者は言う。
それでもダメだった。
俺を撥ねた車の運転手は事故の前に亡くなっていたらしい・・・心臓麻痺だったらしい。
事故を起こす前に既に息を引き取っていた人に文句の言いようすらない・・・。
結局は運が悪かったんだ・・・と、無理矢理自分を納得させる。
ちなみに猫は無事だったらしい・・・走り去る姿が目撃されていたそうだ。
実の所、事故の経緯や責任の所在なんてどうでもよかった。
いまさら経緯を知った所で俺の左足はもう動かないんだから・・・。

『もう踊る事は出来ない』

自分の人生のほぼ全てを埋め尽くしていた『踊り』。
『踊る』事が生き甲斐だった。
その生き甲斐が、たった一つの事故で無残にも打ち砕かれた。
『踊る』事が生きていく術だった。
俺はこの先どうすればいいんだろう・・・。
『踊り』以外にまともに出来る事なんて何もない。
動かない左足を抱えながら何をすればいいのかわからない。
左足が動かなくても踊ろうと思えば踊れるかもしれない。
だけど、俺はそれじゃ満足できないと思う。
体の全てを動かして自由に何にも邪魔されることなく踊りたい。

『頭』では分かっていても、俺の『心』は分かってはくれなかった。
身体を起こすことが出来るようになって担当医に聞いてみた。
リハビリをしても回復の兆しは見込めない
。
手術をしても見込みがない。
それが医者の答え。
絶望的だった。
両親や劇団の仲間達が励ましに来てくれた。
俺のファンだと言う人達から大きな花束が届いたこともあった。
だけど、俺の心は晴れないまま今日に至る。
気が付くと病院の屋上から眼下に広がる街をじっと眺めていた。
こんなにも世界は広い。
こんなにも空は蒼い。
こんなにも・・・。

「踊りたい」

たぶん無意識だったと思う。
左足が動かなくなってから初めてだ。
心の底で燻ぶっていたその想いを口にしたのは・・・。
一度口にしてしまえばもう抑えることが出来なかった。

「踊りたい・・・踊りたい・・・踊りたい・・・踊りたい・・・踊りたい・・・」

壊れたように唯ひたすらにそう呟く。
いつの間にか頬を伝う涙。
止め処なく流れ出す涙に想いを乗せて呟く。

もう叶う事の無いとわかっていても『踊りたい』と言う想いを言葉に乗せて。

『踊りたいですか？』

不意に声が響く。

「踊りたい！！」

その問い掛けに声を荒げて答える。

『どうして？』

誰の声なのか・・・そんな事はどうでもよかった。

「踊る事が好きだ・・・」

あらん限りの声でそう答える。

『なぜ？』

なぜ？・・・愚問だ。

「踊ることが俺の全てだ・・・」

そう、俺は踊ることが大好きなんだ。

『全てを捨てる覚悟はありますか？』

全てを捨てる覚悟？

「踊る事が出来るなら悪魔にだって魂を売ってやる！！」

頭に響く問い掛けに間髪いれずにそう答える。

『あら・・・それは困ります。踊りを愛する子を悪魔なんぞに渡してなるものですか』

・・・？

ふと我に返る。

あわてて周囲を見回す。

誰も居ない。

屋上に居るのは俺・・・唯一人。

「誰・・・だ？」

少し怖くなってそう口にした。

『自己紹介はまだでしたね。この世界での私の名は・・・えーと・・・なんでしたっけ？』

何でしたっけ？って聞かれても・・・。
聞きたいのは俺の方だし・・・。
と言うか、あまりにも踊りたくて俺の頭がおかしくなったのか？

『大丈夫ですよ、貴方は正常ですから心配ありません。それよりも私の名ですが・・・カリオペーでもない、クレイオーじゃない・・・エウテルペー・・・は何か微妙ね・・・メルポメネー、タレイア・・・う～ん・・・テルプシコラー・・・エラトー・・・ポリュヒュムニアー・・・ウーラニアー・・・・・・
どうしてこの世界の私の名前はこんなにも美しくないのですか？』

いや、そんなに拗ねた口調で聞かれても・・・。

って言うか、その名前？ってミューズの神々の名前じゃ・・・・。

『！？・・・そう！それです！！・・・コホン、私の名はミューズ。文芸・音楽・舞踊その他諸々を司る者です』

は？

なんかあからさまに『それにする！！』的な名乗り方されても・・・・。

・・・・・俺の頭はやっぱりおかしくなったのかも知れないな。あまりにも踊りに執着しすぎて何処か狂ったんだ・・・・・。なんか嫌だな・・・自分が狂ったことが自覚できるなんて。

『ですから貴方は正常です。貴方の『想い』に私が答えた。ただそれだけですよ』

・・・・・・。
だめだ・・・頭の中に声が響くとか重症だ。
俺は杖を持つ手に力を込め、右足を前に出す。

『・・・・・・貴方はもう一度踊りたくは無いのですか？』

その問い掛けに俺は足を止める。
踊れるなら踊りたいさ・・・・・・。
そう心の中で呟く。

『もう一度問います・・・・・・全てを捨てる覚悟はありますか？』

捨てれば踊れるならなんだって捨ててやるさ・・・・・・。

『親も、友人も？』

・・・・・・。

直ぐに言葉を返せなかった。

親を捨てる？

俺のわがままを今まで許してくれた親を？

友人を捨てる？

共に切磋琢磨した仲間達を？

『この世界を捨てることが出来ますか？』

・・・・・・。

世界を捨てる？
世界を捨てればまた踊れるようになるのか？

『なります』

・・・・・・。
それは死ねって言うこととどう違うんだ？
死んで魂になって踊ればいいのか？

『死ぬ必要なんてありません。・・・この世界とは違う・・・・・・・
数多在る別の世界で・・・・・・』

別の世界？
まるで架空の物語みたいな話だな。

『人とは素晴らしいものですね。人は永遠に知りえぬ『真実(ごと)』を、その豊かな想像力や表現力をもってして辿り着く・・・決して知る事の出来ない筈なのに。
例えそれが人にとっては架空の物語だとしても『真実(じじつ)』に辿り着くのですから・・・・・・文芸・音楽・舞踊・哲学・天文・芸術・・・・それらを司る私はとても嬉しく思いますよ』

・・・・・・。

『直ぐに決断出来る事ではありません。・・・貴方が全てを捨て、もう一度踊りたいと言うのであれば・・・。
二日後の満月の夜、もう一度この場で会いましょう。・・・・・・決して強制はしません。ですが私は・・・踊っている貴方の姿を見たいと思っています』

・・・・・・。
頭の中に響いていた声はそう告げた後もう聞こえる事は無かった・・・。

俺は病室に戻った。
もう一度・・・もう一度自分の身体全てを使って踊る事ができるかもしれない。
現実離れした突拍子無い提案。
俺が狂っていて・・・唯の妄想だったとしても、今の俺にとっては縋り付きたくなる。
現実なのか夢なのか今の俺には判断がつかない。
自分が狂っているのか・・・それとも正常なのか・・・。
それすらも判らないのだから。
思考の海に沈みかかっていると急に病室の扉が開いた。

「調子はどうだ？」

見慣れた顔が二人入ってくる。

「ぼちぼち・・・って感じかな」

「そう・・・」

ベッドに立て掛けたままの松葉杖に視線を向けた女性が呟いた。

「ちょっと散歩に行っただけだって・・・お袋は心配しすぎ」

「・・・・・・そうね」

俺の病室に来た二人は両親だ。
俺がこの病院のこのベッドで一日を過ごすようになってからは二日に一回は必ず見舞いに来てくれている。
正直な所、俺はこの時間が好きじゃなかったりする。
俺の我侭で両親には散々迷惑かけてきたから・・・。
そして今・・・いや、この先も今以上に迷惑をかけてしまう。
その事を嫌と言うほど実感している今現状、俺は両親に合わせる顔が無い。

「・・・何かあったのだろう？」

「え？」

「・・・あなた」

親父の一言に心臓が飛び出そうになる。
何の事を言っているのか理解できない。
両親に対する引け目をかんじている事なのか・・・それとも屋上での事なのか。

「べ、別に何も無いさ・・・」

「・・・・・・踊りたいのだろう？違うか？」

心臓が止まる。
呼吸が続かない。
止まった様に感じた心臓の鼓動が速くなる。

「あなた！」

「母さんは少し黙っていろ・・・お前は踊りたいんだろう？」

親父の一言が胸に突き刺さる。

「私達が何も知らないとでも思うか？こんな事になってお前が私達に引け目を感じている事を気づかないとでも思ったか？
私達は知っているぞ？今まで迷惑かけたとでも思っているのだろう？
これからも迷惑をかけてしまうとでも思っているのだろう？」

親父の一言がザクザクと俺の心に突き刺さる。
親父には・・・いや、恐らくお袋も気づいていたのか・・・。

「・・・踊りたいのでしょう？」

黙っている俺を見かねてかオフクロがそう問いかけてくる。
言えるわけない。
この俺の左足はどうやっても動くようにはならないんだ。
ここで俺が肯定しても何も変わらないってわかっている筈だ。

「屋上で叫んでいたじゃないか」

身体が硬直する。

「誰かと話していたのだろう？」

息を吸う事もできない。

「・・・どうして」

「別に盗み聞きしたわけではない。病院の入口に向かう途中に聞こえたのだよ・・・屋上からお前の声が」

はは・・・そりゃそうだよな。
あれだけ大声出してれば聞こえるに決まってる。

「何があったのかは知らないが・・・踊れるようになるんじゃないか？」

「っ・・・・」

親父の一言に身体が跳ねる。

「何を迷っている・・・お前にとって『踊り』とは何だ！！今まで続けてきた努力を今ここで捨ててしまうつもりか！！
目の前にチャンスがあるのであれば何故掴もうとしないのだ！！」

親父の言葉が俺の心を抉る。
そんなことは判ってるさ。
・・・だけど両親を・・・・・・この世界をを引き換えにしてまで優先すべきことなのかわからないんだ。
だから俺はその想いを口にする。

「・・・・・・えなくなる」

「なんだって？」

「・・・もう会えなくなる」

「・・・・・・・」

「『踊り』を選べば友達や劇団の仲間・・・・・・・それに親父やお袋にだって会えなくなるんだよ！！」

「・・・・・・・っ」

その言葉を聴いてお袋が言葉を詰まらせた。
まだ確定ではない。
妄想か現実かすら区別がつかない事なのに・・・・。
だけど隠しておくことはできなかった。

「だからなんだ？」

「あな・・・た？」

「お前がまた踊る事ができるならそのくらい安いものだ。何も迷う必要は無い」

よくわからない。
親父が言っていることが理解できない。

「安い・・・だって？」

「あぁ、安い。一生動かないはずのお前の足が元の様に動くのなら私達など捨てていけ」

親父の言葉に俺は何も言えなくなる。

「・・・そうですね。あなたがまた踊れるのであれば私達のことなんて気にしないで好きなだけ踊りなさい。
私達があなたの重荷になるのなら私達は喜んで身を引く。
私達はあなたの親で在り、あなたが初めて踊って見せたあの時から一番の『ファン』。だから・・・」

「行け」
「行きなさい」

なんだよ・・・・・・。
なんなんだよ・・・・・・。
気づけば俺は声を上げて号泣していた。
思えば嬉しくてないたのは初めてかもしれない。
目の前の両親に心から感謝する。
こんな両親の元に生まれて俺は本当に幸せだと思う。
だから俺は・・・・・・。

満月の夜。
松葉杖をついたまま屋上に上る。
屋上へと続く扉を開くとそこには光を纏ったような何かが佇んでいた。

『こんばんわ』

「こんばんわ」

何気ない挨拶を交わす。

『いい表情ですね』

「かな？」

光を纏った何か・・・輪郭はつかめない何かから聞こえてくる声はあの時の声と同じ。
なぜかミューズは微笑んでいる気がした。

『準備はいいですか？』

「行く前に頼みがあるんだ」

『なにかしら？』

「5分・・・いや、1分でいい。少しだけここで踊れるようにできない？」

俺はそう言いながら屋上へと繋がる扉へと視線を向ける。
そこには俺をじっと見つめる両親の姿があった。

『・・・あちらに言った時に一つお願いを聞いてくれるのであれば』

「わかった」

ミューズと思われる何かが頷き、ゆっくり近づいてくる。
そしてゆっくりと腰を屈めながら俺の左足を優しく撫でた。

『これで良し・・・もう踊れますよ』

やさしい声でミューズは言った。
踊れる・・・。
恐る恐る左足・・・その先の指を動かそうと力を入れる。

「・・・・・・」

音楽は無い。
床の段差もこの程度なら問題ない。
ブランクは心配だけど今なら・・・・・・。
トン。
一度だけ跳ねる。
着地と同時に流れるように前に向かってアラベスク。
もう一度跳ねる。
今度はさっきよりも高く。
空中でファイイ（跳びながら身体の向きを変える）。
左足が地面につくと同時にアン・ドゥダン。
踊れる。
俺はもう一度踊れる。
親父、お袋・・・。
これはオーディションの為にずっと練習した演目。
たぶん、これが今迄で一番うまくいった俺の『バレエ』なんだ。
両親の視線を感じながら踊り続ける。
唯ひたすらに頭の中に流れる曲に乗って。

パチパチパチ・・・・・・。
長いような短いような・・・そんな想いだった。
これがこの世界で踊る最後の『ダンス』
俺は両親を見据え、ゆっくりとお辞儀する。
最後の観客であり・・・最高の『ファン』に感謝して。
左手を胸に当て、右手を広げる。

「ありがとうございました」

礼をしながら最大限の想いを乗せて最後の言葉を口にする。
そして俺は光に包まれた。

「いってらっしゃい」
「いってこい」

そう聞こえた気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1304ba/

Harmonia

2012年1月3日04時53分発行